

佐野真由子

日本の社会に一時代を画し、いまでも多くの人が共有する経験と思い出をもたらし、一九七〇年大阪万博は、日本における本格的な万国博覧会研究の契機ともなった。開幕に先立つ一九六〇年代から、現在進行形の大事業であった大阪万博そのものに関する論評類もさかんに刊行されるようになったが、ここでいうのは、一八五一年のロンドン博を初回として連綿と続いてきた、歴史上の万国博覧会に着目した研究のことである。大阪万博は、世界の物産を広大な会場に集め一望のもとに展示した万国博なるものがイギリスで誕生し、一八五三年ニューヨーク博、一八五五年パリ博と引き継がれ、以降一世紀以上にわたり欧米諸国で開催されたのちに、初めてこれを、アジアないし非西洋の一国が実現したのであった。当時、その歴史に関心が向けられたのは当然ともいえる。

最初のまとまった研究の試みは、京都大学人文科学研究所を中心に、多分野から集合した研究者グループによって着手された。「学際的」という形容にふさわしいその顔ぶれは、万博という巨大複合事業の性格をそのまま語っている。同時に、そうした学際的共同研究を可能にする京大人文研という先駆的組織の存在あってこそ、万博などという膨大な対象をとりあげることができたといえるだろう。その成果である吉田光邦編『図説万国博覧会史 一八五一—一九四二』『万国博覧会の研究』（それぞれ一九八五年、一九八六年、ともに思文閣出版）は、万博の研究に携わる者にとっていまも基本文献の位置を占める。筆者自身、学部学生時代に初めて、万博という限らない魅力に溢れた研究対象と出会ったときも、時を経て自分がゼミ学生を持つようになったときも、両書のお

世話になってきた。

これらの次世代版としての、二一世紀の万博論集を――。冒頭から思い切った自負を述べることが許されるなら、これが、本書をつくるにあたって私たちがめざしたことである。本書の母体である国際日本文化研究センター（日文研）の共同研究会「万国博覧会と人間の歴史――アジアを中心に」は、右の京大グループで最も若いメンバーであった井上章一（現日文研教授、橋爪紳也（現大阪府立大学特別教授）両氏を擁し、その万博研究に導かれてきた世代の筆者が研究代表を務め、さらに多くの新たな顔ぶれを迎えて、ともに議論を重ねてきた。その成果としての本書を、三〇年前の書と同じ思文閣出版から刊行できることは、大きな喜びである。

吉田光邦氏らの成果以降、日本の万博研究には多大な蓄積がある。たとえば国立国会図書館の雑誌記事索引で、「万国博」「万博」などの語を用いて検索すれば、ほとんど数え切れないほどの数の論文がヒットする。注目を集めた単著も少なくない。大阪万博をきっかけにこのテーマが「発見」されて以降、万博は、その全体計画や会場設計から、個々の展示物、また開催をめぐる政治や外交の問題等々まで、さまざまな視角を持った研究者に、無限の考察材料を提供してきたといつてよい。

ただ、そこに見られる顕著な傾向の一つは、欧米諸国で開かれる万国博覧会において、日本がどのように自己の展示を構成し、それが受け取られてきたかという、日本をめぐる文化表象の問題が関心の中心になってきたということである。統計的に調査したものでこそないが、ここに、万博を考える際の、いわば視線の偏重があったことは間違いない。結果として、日本の万博研究は、西洋との関係において「異文化」ないし「他者」としての日本文化がどう扱われてきたかに注目し、ひいてはその背後にある西洋世界の近代化と帝国主義的拡張を批判的に論じるという方向がかなり強いものとなっている。

このことは、日本がその近代化の過程で国際社会との関係を深め、またそこでの自己の位置を確立するうえで、万国博覧会という窓がいかに重要な役割を果たしたか、現に明治政府の重鎮らが万博参加という事業にどれほど重大な意識を払い、諸国へ好印象を与えるべく努力を重ねたかを考えれば、歴史上の関心としては自然であって、それ自体は批判するにあたらぬ。かくいう筆者自身も、学部学生時代にそのような観点から万博に興味を持ち、「文化の実像と虚像——万国博覧会に見る日本紹介の歴史」というタイトルで卒業論文を書き、初めて活字になった著作もその改訂版であった。現在も関心の軸は変化していない。

にもかかわらず、筆者がみずからこの「視線の偏重」に疑問を持つようになったのは、自身の研究ととくに関係の深い一八六二年の第二回ロンドン万博について、日本にかかわる部分だけでなく、その開催経緯の全体を調査したことがきっかけであった。同博は、後掲の拙論でも少し触れるように、当時の駐日英国公使ラザフォード・オールコックの助力によって幕末の日本が初めて参加した万国博覧会であり、いわゆる日本文化の表象というテーマの原点としてもむろん重要である。しかし、だからこそこの万博の全容を知りたいという純粹な動機から、二〇〇七年前後の時期、渡英の機会を見つけては、イギリスの万博関係史料の公式寄託先となっているナショナル・アート・ライブラリー——一八五一年第一回ロンドン博の遺産であるヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（当初の名称はサウス・ケンジントン博物館）の一部局となっている——に籠もった。当時の万博主催者が残した実務資料のファイルを端から紐解くうち、日本の既存研究の多くが日本の万博参加における特徴であるかのように捉えてきた、「異文化」としての日本文化の取り扱いやそれをめぐる政治上の諸問題が、他の非西洋諸国の歴史的な経験と多分に共通しており、あくまでその一例でしかないことに気づいた。

このことは、いったん気づけば当たり前のことのようでありながら、当時、筆者に大きな衝撃を与えた。文化の問題を論じる以前に、日本が万博に参加するようになった経緯自体、日本側から眺めていればむろん特筆すべ

き大事件だが、主催国の実務上は、多数の国々を相手に、大概は一斉に片づけられる事務処理の一環でしかない。拍子抜けするほど淡々としたものであった。

そうした主催国側からの視点、そして、日本と経験を共有する他の非西洋諸国の視点を取り込みながら考察しなければ、国際社会における日本の位置を把握し損ねることになる——「日本文化の表象」という問題に強い関心を持ち、日本を中心に据えて考えてきた自身の視角を、世界史のなかで思い切って相対化しなければならぬ。こうした思いは、筆者にとって万博研究にとどまらずもっと広範な意味を持つようになり、その後の研究スタンスや、おそらく物の見方全般にも大きな影響を受けた。

しかしこのことは、自身の研究対象として日本の事例を掘り下げのをやめるという意味ではない。逆に、一人で世界中のことを調べ、比較するなどというのはそもそも不可能である。ではどうしたらよいのかと悩むうち、そのような世界的な広がりを持つ万博研究を個人で進めることはできないが、互いに比較可能な視点を持つ研究者が共同で試みることはできるのではないか、という考えが生まれた。中国や韓国といった近隣諸国での研究状況についても聞いてみると、万博研究自体の蓄積は日本ほど厚くはないものの、自国の文化の扱われ方に研究が集中する傾向は似ていることがわかり、連携しての研究の必要性に賛同してくださる方々も現れはじめた。初めから世界大の構想で着手するというよりは、まずは近隣アジア諸国との比較を中心に、従来の枠組みを脱した万国博覧会研究のあり方を検討してみようと考えるようになり、そのころちょうど日文研に移籍したこともあって、まずはごく小さな試みから、こうしたアイデアを実行に移す機会に恵まれた。ここまでの研究会の展開を左に記しておきたい。

①二〇一〇年一〇月八日～十一日（於・上海）

研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る」（日文研の稲賀繁美教授を研究代表とする科学研究

費補助プロジェクト基盤研究A「東洋」的価値観の許容臨界——「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」(二〇一〇～二〇一二年度)の分科会として)

②二〇一一年二月二五～二六日(於・京都)

日文研所長裁量経費による研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る(第二回)」

③二〇一一年九月三〇日～一〇月一日(於・京都)

日文研シンポジウム「万国博覧会とアジア——上海から上海へ、そしてその先へ」

④二〇一二年四月～二〇一三年三月(研究会計三回、於・京都)

日文研共同研究会「万国博覧会とアジア」

⑤二〇一三年四月～二〇一六年三月(研究会計一五回、於・京都、大阪、愛知、沖縄)

日文研共同研究会「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」

※このうち二〇一四年一〇月の研究会は、日本万国博覧会記念基金の助成を受け、国際ワークショップ「万国博覧会の歴史と未来」として海外ゲストを交えて行うことができた。本書執筆陣のうち、ユク・ヨンス、ジラル・デッリ青木美由紀、曹建南の三氏はその際のゲストである。この場を借りて、同基金を運営される公益財団法人 関西・大阪21世紀協会にあらためて御礼申し上げますとともに、ワークショップ参加後、このような形で研究会にかかわり続けてくださった三氏に感謝したい。

はじめに

①②は本当に小さな集まりだった。このときから本書刊行にいたるまで一緒に活動してくださっている、徐蘇斌氏(天津大学)、青木信夫氏(同)、鶴飼敦子氏(東京大学)には、いくら感謝しても足りない。また、①の上海行きを通じて、いまでは研究会を牽引するメンバーとなってくださっている岩田泰氏(当時、経済産業省博覧会推進室長)、江原規由氏(当時、上海万博日本政府館長)に出会ったのだった。

二〇一〇年に上海で万国博覧会が開かれたことが、私たちの研究の直接の導火線となったことはいうまでもない。タイミングも幸運であったが、私たちはこの万博に、一九世紀西洋の産物を非西洋が追い求めてきたという文脈での、いわばキャッチアップの完成としての万博開催とは異なるものを見た。上海万博関係者はその準備段階で、アジアで初めて開催された一九七〇年大阪万博を先行事例として丁寧参照したと聞くが、二〇一〇年の会場で堂々と描き出されたのは、新たなグローバル・パワーとしての開催国中国の利益と欲望であり、またそれに対して参加諸国もそれぞれの仕方と呼応し、中国と自国の関係を表示に表現していた。上海万博は、一九世紀の西洋がつくり出した制度をアジアが消化し、追従も反動も超えて、二一世紀の世界における文明の新しいパランスの可能性を提示する場となったのではないか。上海の会場で得た強烈な印象は、初期のメンバーとの議論を通じ、今日あらためて、とりわけアジアを舞台に万博研究に取り組み意義についての確信につながった。

同時に本研究会は、万博の過去と現在を合わせて研究の組上に載せるといふ明確な方針を持つことになった。そもそも第二次大戦後、または一九七〇年大阪万博以降、万国博覧会の時代は終わったともいわれてきた。たしかに、万博以外にも巨大な国際イベントの開催がめずらしいものではなく、国境を越えた人の移動も日常的になった時代のそれは、一八五一年にロンドンで始まってから主に二〇世紀初頭にかけて、欧米列強とそれを追いかける国々が産業の進歩を競い、世界を支配する力を誇示し合った万国博覧会とは性格を異にする。ゆえに従来、万国博の研究は、冒頭に紹介した京大人文研の研究すらが第二次世界大戦前まででその時期的範囲を区切っているように、役割を終えたという一九世紀型の万博を主に歴史家が扱うケースと、現代の万博をイベント分析の一環としてとりあげるケースとに分断されていたといつてよい。上海万博からスタートした私たちは、それらを同一線上の展開として理解することに意義を見出し、一九世紀半ばから今日までの万博史をつねに往還しながら議論してきた。

こうした方向性が徐々に明らかになってきた段階で開催したのが③のシンポジウムである。準備段階では単発の企画だったが、今日の共同研究会メンバーの多くはこのときに参加して下さっていた。これをぜひ継続的にやっつけていこうという皆さんの声に支えられて、④⑤と展開して頂くことができた。その間にも、お一人お一人のお名前は挙げきれないが、すばらしい仲間がさらに何人も加わってくれた。

メンバーの専門分野は、外交史、法制史、美術史、工芸史、建築史、思想史、文化人類学、地理学等々、文字どおり多岐にわたる。これは、万国博覧会という研究対象が自ずと招来する多様性というべきだろう。本研究会にはさらに、右の岩田、江原両氏をはじめとして、日常は研究を本業とするのではない、万国博覧会の企画・実施といった現場の仕事に携わる方々にも参加していただいている。現場のプロと研究者とをカテゴリー分けせず、同じ土俵で議論し、手を組んで同じ目標に向かうような環境をつくっていききたいという考え——夢——は、万博研究に限らず筆者がより深いところに抱いているものだが、万博という実践的素材をテーマとする研究会であつてみれば、そうした顔合わせで構成するのは当然と思われた。とりわけ③のシンポジウムを通じて、そのような同じ土俵での議論が可能であることがはっきりとわかった。

本書は直接には⑤の研究成果と位置づけられるが、こうした①からの全過程を経て生まれたものである（各研究会の記録は巻末に掲載）。

ところで、本研究会ないし本書の目的は、「万国博覧会研究」なるものを領域として確立しようとするのではない。むしろその逆である。

およそ人文社会科学系の研究、なかでも近代以降の歴史に関心を持つ人であれば、自身の読書のなかで万国博覧会というものが必ずどこかに登場したはずであるといってもよいのではないか。実際、万国博は、他に類似の

大イベントが存在しなかった一九世紀はもちろん、第二次大戦後もなお、人間生活を一步前へと推し進めるさまざまな新しいアイデアが公表される場であり続けた。また世界最大の公式イベントとして、それが開催されたという事実や、その場を訪れたという経験は、とくに開催国の人びとの間に共通の記憶をつくり出し、ひいては社会のなかに、濃厚に色づけされた世代というものを生み出してきた——日本において一九七〇年大阪万博がそうであったように。万国博が世界の歴史記述の各所に顔を出すのは、実は当然なのである。

しかし、万国博の何たるかを知らなければ、世の重大事とは関係のない遊興的な催しとして、あえて関心を持つこともなく通り過ぎてしまうのではないだろうか。そしてまた、一般的な歴史書で触れられる万国博覧会は、大概その程度に扱われている。逆に、いったん万国博なるものに着眼すると、これが歴史上、人間生活にどれほど広範な影響を及ぼしてきたか、社会の動きが世界各国におけるたびたびの万博開催といかに密接に連動しているかを知り、もはや無視することはできなくなる。

この点において、右の④の共同研究会を開始する直前、一八六二年ロンドン万博の一五〇周年を記念してヴェクトリア・アンド・アルバート博物館で開催されたシンポジウム *Internationality on Display: Revisiting the 1862 International Exhibition* に参加し、イギリスを中心とする欧米の研究者らと交流する機会を得たことは、筆者が本研究会を続けてくるうえでとくに示唆的な経験であった。ここでは、万博を研究することの、万博それ自体の解析にとどまらない大きな意義が十分に認知されていた。そのことを説明抜きで共有できる環境に触れ、背中を押される思いがしたのである。

これは、歴史上早くから万国博覧会を開催してきた人びとならではの捉え方ではあろう。“Internationality”を標榜しながら、筆者以外には非西洋諸国の参加事例を提供する発表者が招かれていないというシンポジウムの構成に、彼私の視点のギャップを味わいました。まずはアジア諸国を中心に比較・連携研究を進め、こうした場で

の非西洋諸国からの発信力をもっと鍛えなければとの思いを強くしたものである。また、むろん欧米の万博研究においても、たとえば日本などの「異文化」を専攻する研究者には、先述の日本での研究傾向とよく似た特徴も見出される。しかし全体としてはそうした異文化展示の問題よりも、このシンポジウムによく表れていたように、万博を人間社会全体を変化させてきたエンジンと位置づけて考察する視点が勝っており、万博という素材は、より広範な人びとが関心を持ち、研究対象としてとりあげうるものと考えられている。

本研究会はけっして「欧米風」を志したものではないが、万博を捉える視野の広さは右の状況と重なるところがある。メンバーはいずれも、「万博研究家」を標榜し、それに打ち込む者ではない。それぞれの文脈で万博と出会い、人間やその社会、世界への理解を深めるうえで、万博という糸口の重要性に注目するにいたった人たちであると述べて、大切な仲間の不興を買うことはないだろう。だからこそ、万博という相当に具体的なテーマを核に持ちながら、研究会での議論はいつも限らない広がりを持つものでありえた。私たちが本書を通じて伝えたいのは、そのような万博の見方である。逆にいえば、近代以降の人間社会に関する限り、いかなる領域の研究に従事しようとも、万博というものは着目するに足る、または、けっして目をそらして通り過ぎることのできない対象であることを、ぜひ、知っていただきたいと思う。本書のタイトル「万国博覧会と人間の歴史」は、それを表したものである。

以下の本論に並ぶのは、こうした議論を通じてお互いに刺激し合った数年間の過程から、メンバーがそれぞれ導き出し、深めてきた視角である。研究会が内包するようになった広範な可能性に鑑みて、会の名称に付していた「アジア」の語は書名から外したが、当初からの問題意識を反映し、全論文の約三分の一が近隣アジア諸国の事例を扱っている。部立ては、万博事典などに見られる年代順や国・地域別の配列を避け、人間生活に身近なと

ころで万博が果たしてきた役割をわかりやすく表現することを考えて構成した。ただし各部のなかは、扱っている内容に応じてほぼ年代順になっている。

第I部「博覧会の人」に収載したのは、特定の個人（またはその集団）に着目して万博との影響関係を考察した論文である。これは、研究会での発表と意見交換の積み重ねのなかから、徐々に共通の着眼点として浮かび上がってきたものであり、本書が提示する特徴的な視角であると考えている。ここからは、万博が国と国との関係で動く抽象的な事象ではなく、ある時代を生きた人間たちの物語そのものであり、個々人の生身の人生と深く関わっていることが伝わるであろう。

冒頭の拙論でとりあげたのは、初代駐日英国公使ラザフォード・オールコックである。前記のとおり日本を一八六二年ロンドン博に導いたことで知られるが、ここでは彼が、一八五一年の第一回ロンドン博をはじめ他にいくつもの万博にかかわった経緯をたどり、ヨーロッパとアジアをつないだその人生と、万国博覧会というものの展開とを併せ考察した。芳賀徹氏は、その後、明治維新を経た日本にとって、実質的に近代化の緒をなした岩倉使節団が米欧回覧から体得した文明理解を、一八七三年のウイーン博視察という場面に絞り込み、団員らのいきいきとした観察眼を追って論じられた。それに続く時期を扱った寺本敬子氏の論考は、日本の輸出産業の発展、ひいてはヨーロッパにおけるジャポニスムの隆盛へとつながる国際文化史上の展開に重要な画期をなした、一八七八年パリ博への参加にあたり、現場で欠くことのできない働きを見せた前田正名という一人の官僚の存在にスポットライトを当てる。一方、ユク・ヨンス氏の論考は、朝鮮王国の一八九三年シカゴ博参加を担った鄭敬源という官僚に着目し、この仕事を通じて西洋文明に接した彼の動向を追跡したものである。ユク氏が「朝鮮の福沢諭吉」というこの人物について、広範な韓国語の史料によってその事績が紹介されたことは貴重であり、日本の読者にとってはまさに比較研究の醍醐味を与えてくれることであろう。

以上の論文が公的な立場に立つ人びとを扱ったのに対して、武藤夕佳里、青木信夫、林洋子の三氏が手がけられたのはそれぞれ、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、万国博覧会への参加経験を積み重ねながら自身の作風を確立し、人生の方向をも定めていった七宝作家・並河靖之、留学生として一九二五年パリ博を見たのち、帰国後の中国で一九二九年に開催された西湖博覧会において中心的な役割を果たし、中国建築史に一時代を築くことになった建築家・劉既漂、そして日仏をつないだ画家・藤田嗣治——この高名な人物の万博とのかかわりはこれまでほとんど顧みられることがなかった——と、三様の芸術家たちである。その万博との関係のあり方は、公的立場の人びとに比べてさらにさまざまで、だからこそ、こうして万博との出会いとみずからの歩みが深く絡み合った人びとの事例は、これ以外にも存在するはずの多くの人生——むろん芸術家だけでなく、いろいろな職業の人を含めて——へと視野を広げてくれる。

続く第Ⅱ部「博覧会の場所」もまた、研究会で議論を重ねるなかから結ばれた焦点である。ウィーベ・カウテルト氏は、朝鮮王宮の地が一九一〇年以降の日本統治下で博覧会場に用いられ、その伝統的な風水の価値が失われると同時に、そこに新たな政治的意味合いが付与されていく様を空間デザインの立場から論じられた。増山一成氏がとりあげたのは、一九四〇年に予定され、現実には開催されることなかった日本万国博覧会——その会場となるはずであった東京の隅田川近傍——である。読者はここから、「実現しなかった万博」もまた「人間の歴史」を明確に動かしてきたことを知ることになる。組み合わせを変え、藤田嗣治を扱った第一部の林論文と併せ読まれるなら、実現しなかったゆえに現実の歴史の画期としては注目されてこなかった一九四〇年博が、その準備が継続していた間に日本の文化史に与えた大きな影響を、あらためて検討しなければならぬことに気づかされるであろう。

中牧弘允氏は、日本でついに実現した一九七〇年大阪万博の会場が持っていた特異な構造を、同博の隣接地に

同時代に建設され、切つても切れない関係にある千里ニュータウンの構造と重ね合わせて分析された。他方、神田孝治氏が着目したのは紀伊半島、熊野の地である。二〇世紀全般にわたる長いスパンで、今日では古道で有名な熊野が観光地としてどのように認識されてきたのか、その変遷を追跡し、そこに同地での博覧会開催が絡む様子が具体的に明らかにされる。

第三部には、社会の諸側面の発展・変貌を、博覧会との密接なかかわりから考察した論文を収めた。「博覧会と仕事・社会」と名づけたのは、とくに、博覧会の実施にかかわる職業をとりあげたものが多いという実態を反映したものである。第一部のように特定の個人を扱ったものではないが、やはり「人間」に着目することを重視してきた当研究会の特徴がここに現れているとともに、先にも触れたように博覧会の制作現場を熟知するメンバー諸氏が、みずからの知見を惜しみなく披露してくださった論考も含まれ、それらを収載することができたのは本書の誇りとするところである。

石川敦子氏は、明治以降の日本で急速に発達した展示専門業者——「ランカイ屋」——について、業界の雄である乃村工藝社で豊富な資料の整理にあたってこられた長年の経験を生かし、余人が試みたことのない整理と考察を手がけられた。日本の博覧会史の特徴ある一側面を初めて詳細に照らし出したものである。井上章一氏がとりあげた「コンパニオン」もまた、博覧会とともに発生し、推移してきた職業にはかならない。世上、大阪万博のコンパニオンはよく知られるが、一世紀をさかのぼってそのルーツが語られる。同時代のメディアに登場した多様な言説に基づく論考は、女性の社会的地位をめぐる問題とも裾野を接している。続く瀧井一博氏の論文は、一転して初代帝国大学総長渡辺洪基の発想と実績を紹介し、博覧会ブームとなった明治の世相と重ね合わせる。

鵜飼敦子氏は、もとより日本の万国博覧会研究と深いかわりのあるジャポニスムを専門とする立場から、一九世紀の万博に日本から出品された金唐紙きんからかみという具体的な品物に着目することで、従来のジャポニスム研究の

持つてきた視角に疑問を投げかけている。ジャポニスムという現象を文化のグローバルな影響関係のなかに相対化しようとする試みの一歩がここに踏み出されたと思いたい。橋爪紳也氏は都市の電化という問題を通史的にとりあげ、博覧会史として論じられた。技術的な面も、人の心にかかわる面も含めて、博覧会によって社会の変化が推し進められてきた、その最も典型的な一側面が鮮やかに映し出されている。

澤田裕二氏は、ご自身が催事の取りまとめにあたられた二〇〇五年愛知万博を主な素材としながら、プロデューサーの目から見た博覧会の企画・制作の仕事について丁寧に整理してくださった。一方、岩田泰氏は、同じく博覧会づくりの仕事を、みずからが政府内で統括にあたった二〇一〇年上海万博、二〇一二年麗水万博への日本の参加実務の経過をたどることで、行政の立場から、しかし一執筆者として率直に解き明かされた。異なる視点から書かれた両論文は、行政と、いわゆる「業界」との連携が鍵を握る、独特ともいわれる日本の博覧会づくりの現場の構造を十全に語っている。

最後に、第IV部「博覧会の形成と展開」を置いた。ここに収めたのは、万国博覧会という事業それ自体や、万博をめぐる価値観の推移にかかわる論文である。市川文彦氏は、フランス語の *exposition universelle* という万博の呼称にあらためて注目し、一九世紀にたびたび開催され、初期の万博史を主導したパリ博の性格を、万国博ならぬ「万物」博として分析された。ジラルデッリ青木美由紀氏は、これまで日本では知られていなかったオスマン帝国の万国博覧会とのかかわりを、大量の史料調査と現地での研究生活の成果から論じられた。先述のとおり本研究会では当面、主にアジア、とくに東アジア域内の比較を重視してきたが、そこから見えてきた問題の多くが、アジア以外の非西洋とも共通するであろうこと、むしろ異なる点も含めて、アジアの外へ広がる世界大の比較がいよいよ有用であろうことが、明確な問題意識として共有されつつある。青木氏の研究はその大きな展開への橋がかりとなるものである。

徐蘇斌氏は、万博への参加を通じた近代中国の歩みを、中国国内での博物館の形成プロセスまでを含め、先行研究と独自の史料分析を踏まえてまとめられた。現時点では論文の形ながら、この分野の研究における基本文献として参照されることになるであろう。日本のケースとの比較はもちろん、右のジラルデルリ青木論文との比較も興味深い。対して武藤秀太郎氏は、中国が国内で博覧会を開催するようになっていった側面に目を向け、初の本格的な博覧会と位置づけられる一九一〇年南洋勸業会に主な焦点を当てて、その経緯を日中関係の推移を背景に分析された。

川口幸也氏は、万国博覧会としてはアジアで初めて実現した一九七〇年大阪博において、とくに世界各地の美術の取り扱いに表れた政治性を論じられた。万博の持つ、産業・技術の祭典としての性格、また一方で、歴史的なオリエンタリズムの観点に隠れ、かえって見落とされてきた、今日の多くの現代美術展につながる展示倫理の問題がここに指摘されている。江原規由氏は、ご自身が二〇一〇年上海万博において日本政府館長を務められた立場を振り返り、万博実現までの道のりを支えた中国の歴史上の人物らに思いを馳せつつ、貴重な経験を開示された。そして、最終章となる曹建南氏の論考は、唐代から二一世紀の中国にいたる時間の流れを視野に入れ、中国における「博覧会」なるものの形成と展開を追跡された壮大なまとめである。

さて、右の曹論文では、現代における「博覧会」という語の多様な使われ方、他方で類似の事業を指す他のさまざまな用語の存在も、一つの論点となっている。日本の場合に目を向けると、もともと西洋語を訳した万国博覧会、同種の事業を国内規模で実施するようになった際の内国勸業博覧会に始まり、今日、各地の自治体主導で開かれる地方博覧会やデパートその他の催事としての博覧会にいたるまで、「博覧会」の語が乱れ飛ぶありさまは、研究会でも当初からメンバーの関心が集中した問題の一つであったが、こうした日本での事情に関しては本

書で独立した論考とすることができなかった。中国での展開をとりあげてくださった曹氏に感謝したい。同じ漢字文化圏において、これも比較の興味の尽きない論点である。

「博覧会」の語はいかにも乱用されている観があるが、この状況を批判したり、「本当の」博覧会はどこまでであるかを定義しようとしたりすることには、あまり意味がないと考えている。今日、一般の催事で「博覧会」というネーミングが乱用を招くほどに好まれていなければ、一九世紀、日本で「万国博覧会」の語が定着し、この現状にいたるまでが、まさに追うべき歴史の一側面というべきだろう。もともと、実際に開催される万国博覧会に関しては、その発祥から八〇年近く経過した一九二八年に国際博覧会条約が採択されて一定の制度化を見、以降、改正を経ながらも、同条約のもと、その事務局である博覧会国際事務局（BIE）に登録・認定されたものが公式のそれであるという明確なルールがある。その範囲の万国博（正式には「国際博覧会」）に限定して研究対象とする選択肢もありうるかもしれないが、本研究会ではそうした考え方はとらなかつた。

したがって、本書においては、「博覧会」という語の用い方はその現実の状況に応じて多様なままになっていること、各執筆者がとりあげた対象も狭義の万国（国際）博覧会から、その受容によって国内的に展開した博覧会まで、さらに曹論文のようにその周辺に広がる各種の博覧会をも含むものであることを、ここでお断りしておきたい。しかし書名には、その考察の中心に位置するものを表現するために「万国」博覧会を用いた。

各論考が提示する「万国博覧会と人間の歴史」の諸相を、味読いただければ幸いである。

おわりに

本稿を執筆している二〇一五年七月、イタリア・ミラノで国際博覧会が開催中であり、日本では二度目の大阪万博誘致について検討が始められている。前者へは先月、研究会の有志メンバーとともに足を運ぶことができた。一八七三年ウィーン博の会場図面を彷彿とさせる、長い中央通路を挟んで各国展示場がずらりと並ぶ構造でありながら、ウィーン博では地球上の極東の国は会場の東端へ、西洋諸国は西半分へと地理上の順に従って展示スペースを配置したのと異なり、ミラノでは東西混交、博覧会場でのみ「国境」を接する国々の組み合わせが興味深かった。大阪府の誘致検討会には橋爪紳也氏（座長）、中牧弘允氏、筆者と、本研究会のメンバーが参画し、また府の担当官と研究会の交流もある。万博開催は地元の財政に大きく依存するものでもあり、その実現のほどは現時点ではまったくわからないが、もし誘致に向けて動き出すことになれば、これまでにない、まさに「人間の歴史」に一時代を画する万博を立案したいものだと話し合っている。

これら、二〇一五年現在で最新の万博と、未知の万博とは、研究会の議論のためにはこれからの素材であり、いずれも数か月前までに脱稿していた本書の論考ではとりあげられていない。万博が現在進行形の課題であることを実感しつつ、地球の裏側で今日も続いているはずのミラノの喧噪を楽しく思い起こしながら、まずは本書を世に送りたいと思う。

今後は、本年一二月に、本書をベースに国際的なネットワークの拡大を模索するシンポジウムを日文研で開催することを予定している。それ以降の活動について現時点で確定的な計画は立てていないが、大き

く三つの目標を掲げておきたい。一つは、これまでに着手した近隣アジア諸国との比較ないし共同研究を、その内容だけでなく活動形態そのものの相対化をめざして展開していくことである。つまり、アジア諸国との比較を通じた互いの相対化を唱えながらも、日本で研究会を実施し、成果は日本語で公刊するという形を少しづつ脱皮し、各国での実施、多国語での出版という形へ移行する——費用を要することでもあり簡単に実現できるわけではないが、方法を探し続けたいと考えている。

二つめの目標は、巻頭でも触れたことだが、比較研究ないし研究連携の範囲を、アジアの外へも広げていくことである。そして第三に、引き続きこうした議論を重ねながらも、議論のための議論にとどまらず、何らかの実践を通じて社会への提案を試みていくという目標にも触れておきたい。その形や方法は未定であり、これからの挑戦である。

研究会を継続してくる間に実感を深めたのは、万国博覧会というものが、現場の専門家と研究者の垣根を軽々と越えた協働の舞台になりうるということ、そのつながりを、さらに国境を越えていかようにも広げていくことのできる、格好のテーマだということである。巨大な事業である万博の実施に、あらゆる領域の人びとの力が結集されなければならないのはもちろんだが、その現場だけでなく、過去から未来にわたる万国博を対象とした知的検討の場には、従来の発想を凌駕する広範なネットワークキングの可能性が横たわっていると思う。総じてこの共同研究は、新しいネットワーキングの実験であるとすら考えている。

筆者がいま、この研究会をこのように捉えることができるのは、一人一人のメンバーが、文字どおりその実践を通じて、この研究会を、このように形容するしかない協働の場として育ててくださったからである。まずはここまで、未熟な研究代表者を支え、本当に豊かで楽しい時間と経験をつくり出してくださったメンバー各位に心から御礼申し上げるとともに、お一人お一人が同様の経験をここから得てくださった

ことを祈るばかりである。

また、日文研の共同研究会では、研究代表者のほかに所内から幹事を置くことになっている。その実際の役割は研究会によってさまざまだが、代表者が「若造」である当班では、幹事ではなくいわば顧問としてここまでの道のりを見守ってくださった井上章一先生と劉建輝先生に、あらためて感謝を申し上げたい。同時に、研究会の表には現れず、いつも大量の事務作業をこなし、会議室を万端準備し、また制度上の工夫が必要なときは一生懸命に検討して、私たちの新しい試みが実現できるように寄り添い、困難なときにも励ましてくださった、日文研事務局研究支援係の方々への謝意をここに記しておきたい。

私ごとを述べるのをお許しいただくなり、筆者にとつて大学時代の恩師であるという以上に、文化の、世界の見方を教わり、それ以降の歩みをいつも見守っていただいた芳賀徹先生に、本研究会、そして本書に加わっていただけたことは、限らない喜びである。芳賀先生の授業を初めて受けた、大学二年次のクラスで教材となったのが、先生が本書でとりあげられた岩倉使節団の『米欧回覧実記』であり、その膨大な記録で触れられているどんなことからでも構想を膨らませ、八千字執筆せよという学期末小論文のテーマにウィーン万博の場面を選んだのが、筆者の万国博覧会との出会いであった。芳賀先生はどれほどご多忙のときも必ず学生の提出物に赤ペンでコメントを書き込んでくださるのだが、そのときの小論文に——先生はご記憶ではあるまいが——ちよつとしたお褒めをいただいたゆえに筆者は図に乗ってこの道をきてしまったというところもある。このたびのご論文を頂戴して、長くありがたいご縁に深く頭を垂れる思いであつた。

最後に感謝を捧げるのは、本書をつくる作業をいまこの瞬間も続けてくださっている、思文閣出版の田中峰人さんである。以前に一執筆者として参加した論集の仕事でお世話になり、その若さに似合わぬ「一

昔前の編集者のような」お仕事ぶりに、自分が論集をつくるときはどうしてもこの方をお願いしたいと思っていた。その期待どおり、一つ一つの原稿にどれほど労力をかけ、丁寧なお仕事をしてくださっているかはいまでもない。が、それは本当に最後の最後の局面のことである。田中さんは、二〇一一年以降の本研究会に、大事な週末を使ってほとんど皆勤で出席され、私たちと議論の場を、そして食事や笑いの場をともしてこられた。そのような編集者に手がけていただく本を、編者として誇りに思っている。

二〇一五年七月 祇園囃子の聞こえる日に

佐野真由子

執筆紹介(収録順, *は編者)

*佐野真由子(さの まゆこ)

1969年生. ケンブリッジ大学国際関係論専攻 MPhil 課程修了. 東京大学博士(学術). 国際日本文化研究センター准教授.

『オールコックの江戸——初代英国公使が見た幕末日本』(中央公論新社, 2003年), 『阿礼国先后推动中日参展两届伦敦博览会的启示』(陶徳民他編『世博会与东亚的参与』上海人民出版社, 2012年), 『幕末最終章の外交儀礼』(笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版, 2015年).

芳賀 徹(はが とおる)

1931年生. 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻博士課程修了(文学博士). 東京大学名誉教授. 静岡県立美術館館長.

『平賀源内』(朝日新聞社, 1981年(サントリー学芸賞)), 『絵画の領分——近代日本比較文化史研究』(朝日新聞社, 1984年(大佛次郎賞)), 『芸術の国日本——画文交響』(角川学芸出版, 2010年(蓮如賞)).

寺本 敬子(てらもと のりこ)

1980年生. 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了. 跡見学園女子大学文学部人文学科助教.

『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡——1867年パリ万国博の出会いから日露戦争まで』上下巻(一橋大学社会科学古典資料センター, 2009年), 『フランスにおける「日本文化」の受容と生成——1878年パリ万国博覧会とジャポニスム』(森村敏己編『視覚表象と集合的記憶』旬報社, 2006年), 『1867年パリ万国博覧会における「日本」』(『日仏歴史学会会報』28号, 2013年).

ユク・ヨンス(육영순/陸榮洙)

1960年生. (アメリカ)ワシントン大学大学院歴史学科博士課程修了. (韓国ソウル)中央大学人文学部歴史学科教授.

『책과 독서의 문화사: 활자 인간의 탄생과 근대의 재발견』(책세상, 2010)/『本と読書の文化史——活字人間の誕生と近代の再発見』(チェックセサン, 2010年), 『혁명의 배반, 저항의 기억: 프랑스혁명의 문화사』(돌베개, 2013)/『革命の背反, 抵抗の記憶——フランス革命の文化史』(トルベゲ, 2013年), 『트렌드서널 지성사 다시 쓰기: 식민지 시기 '한국적 니체'의 생애연구, 1920~1945』(『서양사학연구』34, 2015)/『トランスナショナル知性史再考——植民地時期「韓国的ニーチェ」の生涯研究, 1920~1945』(『西洋学術研究』35, 2015年).

武藤夕佳里(むとう ゆかり)

1967年生. 京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術文化研究専攻修士課程修了. 並河靖之七宝記念館主任学芸員. 京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター研究員.

『靖之と植治 二人の魁と巴里庭をめぐる人々』(『並河靖之七宝記念館図録 庭園と建物——並河靖之の美空間』2012年), 『平成22—24年度 科学研究補助金基盤研究(C)課題番号 22520696 明治期の技芸(工芸)技術活用による産業創生——京都七宝に見る産業クラスターの萌芽』(研究代表者 武藤夕佳里, 2013年), 『明治期のニッポンを旅した外国人と庭園——並河靖之の巴里庭を中心に』(『京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター 庭園学講座21 日本庭園と文芸』2014年).

青木 信夫(あおき のぶお)

1960年生. 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了. 天津大学建築学院教授・中国文化遺産保護国際研究センター所長.

『建築理論 歴史文庫』(共著, 中国建築工業出版社, 2010年), 『外国古代園林史』(共著, 中国建築工業出版社, 2011年), 『租界建築新動態』(共著, 上海人民出版社, 2011年).

林 洋子(はやし ようこ)

1965年生。パリ第一大学博士課程修了(美術史, 博士)。文化庁芸術文化調査官。
『藤田嗣治 作品をひらく』(名古屋大学出版会, 2008年), 『藤田嗣治画集』全3巻(編著, 小学館, 2014年), 『テキストとイメージを編む——出版文化の日仏交流』(共編著, 勉誠出版, 2015年)。

ウィーベ・カウテルト(Wybe KUITERT)

1955年生。オランダ国立ワゲニンゲン農科大学大学院造園学修士課程修了。農学博士。ソウル国立大学・環境大学院教授。

Themes, Scenes, and Taste in the History of Japanese Garden Art, Leiden University Japonica Neerlandica Series 3 (Gieben, Amsterdam, 1988), *Japanese Flowering Cherries* (Timber Press, Portland, 1999), *Themes in the History of Japanese Garden Art* (Hawaii University Press, 2002)。

増山一成(ましやま かずしげ)

1974年生。法政大学大学院社会科学研究所修士課程修了。中央区総括文化財調査指導員。
『近代日本博覧会資料集成——紀元二千六百年記念日本万国博覧会』(編著, 国書刊行会, 2015年)。

中牧弘允(なかまき ひろちか)

1947年生。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。吹田市立博物館館長。
『上海万博の経営人類学的研究』(編著, 国立民族学博物館, 2012年), 『カレンダーから世界を見る』(白水社, 2008年), 『会社のカミ・ホトケ——経営と宗教の人類学』(講談社, 2006年)。

神田孝治(かんだ こうじ)

1974年生。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。博士(文学)。和歌山大学観光学部教授。

『観光空間の生産と地理的理想力』(ナカニシヤ出版, 2012年), 『観光の空間——視点とアプローチ』(編, ナカニシヤ出版, 2009年), 『レジャーの空間——諸相とアプローチ』(編, ナカニシヤ出版, 2009年)。

石川敦子(いしかわ あつこ)

1958年生。帝塚山学院大学日本文学専攻卒業。株式会社乃村工藝社経営企画部チーフ。

井上章一(いのうえ しょういち)

1955年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。国際日本文化研究センター教授。
『美人論』(リポート, 1991年), 『愛の空間』(角川書店, 1999年), 『パンツが見える。』(朝日新聞社, 2002年)。

瀧井一博(たきい かずひろ)

1967年生。京都大学大学院法学研究科博士後期課程修了。国際日本文化研究センター教授。
『文明史のなかの明治憲法』(講談社, 2003年), 『伊藤博文』(中公新書, 2010年), 『明治国家をつくった人びと』(講談社, 2013年)。

鶴飼敦子(うかい あつこ)

京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員PD(東京大学東洋文化研究所)。

「高島北海の「東洋画」観と西洋」(稲賀繁美編『東洋意識——夢想と現実のあいだ1887-1953』ミネルヴァ書房, 2012年), *Translation, History and Arts: New Horizons in Asian Interdisciplinary Humanities Research* (Ji-Meng and UKAI Atsuko ed., Cambridge Scholars Publishing, 2013), “L’art de la reliure japonisante : Le cas des œuvres de René Wiener à la bibliothèque municipale de Nancy” (*Territoires du japonisme*, Presse universitaire de Rennes, 2014)。

橋 爪 紳 也(はしづめ しんや)

1960年生。京都大学大学院工学研究科修士課程(建築学)、大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了(環境工学)、工学博士。大阪府立大学21世紀科学研究機構教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所所長。

『明治の迷宮都市 東京・大阪の遊楽空間』(平凡社, 1990年), 『人生は博覧会 日本ランカイ屋列伝』(晶文社, 2001年), 『大京都モダニズム観光』(芸術新聞社, 2015年)。

澤 田 裕 二(さわだ ゆうじ)

1957年生。明治大学工学部建築学科卒業。株式会社SD代表取締役社長、博覧会・展示集客施設・イベントプロデューサー、2001年山口きらら博プロデューサー、2005年愛・地球博催事ディレクター、2008年サラゴサ国際博覧会日本館展示・広報・催事プロデューサー等。

岩 田 泰(いわた やすし)

1968年生。東京大学法学部卒業。経済産業省通商政策局アジア大洋州課長。元同省商務情報政策局博覧会推進室長。

市 川 文 彦(いちかわ ふみひこ)

1960年生。大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程中途退学。関西学院大学経済学部教授。

『フランス経済社会の近現代』(共著、関西学院大学出版会, 2009年), 『近代フランス地域企業家群と輸送体系再組織化策: 舟運=鉄道関係への新機軸』(『企業家研究』第6号, 2009年6月), “Expositions Universelles” as Sacred Places: A View from Modern Paris World Expositions (*Senri Ethnological Studies* 82, 2013).

ジラルデッリ青木美由紀(じらるでつり あおき みゆき)

1970年生。イスタンブル工科大学社会科学研究科博士後期課程(美術史)修了。イスタンブル工科大学社会科学研究科非常勤准教授補。

“Léon Parvillée’s Early Years in Istanbul: Cezayirlioglu Mansion and the Church of Surp Kırkor Luzavoriç in Kuzguncuk” (14th International Congress of Turkish Art, Paris, 19-21 September 2011, Frédéric Hitzel ed., *14th International Congress of Turkish Art*, Paris: Collège de France, 2011), 『芸術新潮 大特集「永遠のイスタンブル」』(分担執筆, 新潮社, 2012年9月号), 『伊東忠太のトルコ旅行(仮題)』(株式会社ウェッジより近刊予定)。

徐 蘇 斌(じょ そひん)

1962年生。天津大学建築系博士課程修了。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。天津大学建築学院教授・中国文化遺産保護国際研究センター副所長。

『日本对中国都市与建築的研究』(中国水利水電出版社, 1992年), 『中国の都市・建築と日本——「主体的受容」の近代史』(東京大学出版会, 2009年), 『近代中国建築学的誕生』(天津大学出版社, 2010年)。

武藤秀太郎(むとう しゅうたろう)

1974年生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。新潟大学経済学部准教授。

『近代日本の社会科学と東アジア』(藤原書店, 2009年), 『今井嘉幸と李大釗』(『孫文研究』第55号, 2014年), 『朝河貫一と胡適——日中知米派知識人の思想的交錯』(『アジア研究』第59巻第3・4号, 2014年)。

川 口 幸 也(かわぐち ゆきや)

1955年生。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。立教大学文学部教授。

『展示の政治学』(編著, 水声社, 2009年), 『アフリカの同時代美術——複数の「かたり」の共存は可能か』(明石出版, 2011年), キャロル・ダンカン『美術館という幻想——儀礼と権力』(訳, 水声社, 2011年)。

江原規由(えはら のりよし)

1950年生。東京外国語大学外国語学部。一般財団法人国際貿易投資研究所(ITI)研究主幹。元2010年上海国際博覧会日本館館長、同日本政府副代表、元日本貿易振興機構(JETRO)北京センター所長。『職在中国』(ジェトロ、2003年)、『中国経済36景』(中国外文出版社、2007年)、『上海万博とは何だったのか——日本館館長の184日間』(日本僑報社、2011年)。

曹建南(そう けんなん)

1953年生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了。上海師範大学人文学院副教授。「世博十大名茶の荣誉と責任」(『喫茶去』39号、2012年)、「茶企業の世博参与と品牌建设」(『茶産業品牌整合とブランド文化——首届東亜茶経済・茶文化論壇文集』中国文化出版社、2012年)、「沖縄的飲茶文化と茶業発展」(『茶産業転型昇級と科技興茶——第三屆明州茶論研討会文集』中国文化出版社、2014年)。

ばんこくはくらんかい にんげん れきし
万国博覧会と人間の歴史

2015(平成27)年10月17日発行

定価：本体9,200円(税別)

編者 佐野真由子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

装幀 上野かおる

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
製本

© Printed in Japan ISBN978-4-7842-1819-6 C3020

近代日本〈陳列所〉研究

三宅拓也著

〈陳列所〉とは、地方行政政府によって建設された公共の陳列施設。これらが、都市の農業・工業・商業を奨励する目的で各地に設置された経緯を検証し、明治から昭和戦前期の日本にあまねく普及した〈陳列所〉の実態を、豊富な図版とともに明らかにする。

▶A5判・640頁／本体7,800円(税別)

ISBN978-4-7842-1788-5

京都 伝統工芸の近代

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

京都の「近代」にあって、美術・工芸がどのような変容をとげて現代にいたっているのか。大きく「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場」の視点から、さまざまなトピックスや人物にまつわるエピソードをとりあげ概観する。

▶A5判・300頁／本体2,500円(税別)

ISBN978-4-7842-1641-3

応用美術思想導入の歴史

天貝義教著

ウィーン博参同より意匠条例制定まで

ウィーン万国博覧会への日本初参加から二度の内国勸業博覧会を経て、「デザイン」の法である意匠条例が制定されるまで、応用美術思想がいかに学習され、明治期の美術・工芸界において指導的役割を果たしていったかを明らかにする。

▶A5判・410頁／本体7,500円(税別)

ISBN978-4-7842-1505-8

ジャポニスム入門

ジャポニスム学会編

ジャポニスムの各国別の個性的な展開をやさしく読み解き、さらに建築、音楽、写真、モードという絵画・工芸以外の分野におけるジャポニスムをも射程に入れ、ジャポニスムの全体像に迫る。

▶A5判・284頁／本体2,800円(税別)

ISBN4-7842-1053-9

岩倉使節団の比較文化史的研究

芳賀徹編

比較文化史的視点から岩倉使節団を論じた共同研究。編者をはじめ、日米英の8名が日米英伊伊における使節団を論じる。

▶A5判・358頁／本体6,500円(税別)

ISBN4-7842-1145-4

逆欠如の日本生活文化

園田英弘編著

日本にあるものは世界にあるか

西洋にあるものが日本にはない「欠如」という観点からではなく、出発点を日本においた「日本にあるものは世界にあるか」という新たな方法論に基づく文化比較。

▶A5判・404頁／本体3,800円(税別)

ISBN4-7842-1248-5

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

「日本の近代」の理解において不可欠でありながら、従来必ずしも系統的・組織的に実施されてこなかった日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を344の小項目としてとりあげる。

▶B5判・550頁／本体12,000円(税別)

ISBN978-4-7842-1345-0
